



Title	パースペクティヴの相補性と根元語「我ー汝」：ハーバーマスとブーバーの比較に向けて
Author(s)	嘉目, 道人
Citation	メタフュシカ. 2023, 54, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93963
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パースペクティヴの相補性と根元語「我－汝」 ——ハーバーマスとブーバーの比較に向けて——

嘉目道人

序

ユルゲン・ハーバーマスは、2012年にイスラエル科学・人文アカデミーの招きに応じ、「マルティン・ブーバー記念講義」の第1回の講師としてブーバーを論じた。その内容は、ブーバーの人物評や足跡を含めた概括的なものではあるが、ハーバーマスがブーバーの対話思想に具体的なコメントを寄せている点は注目に値する。

ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論は、少なくともモノローグ的な主觀性を脱中心化し対話的な関係を主題化するという意味において、ブーバーの思想と親和的であると考えられてきた (cf. e.g. Eisinger 2002, 179)。また、ブーバーにおいては最重要の概念である「我－汝」という語を、ハーバーマスも時折用いることがある。ところが、ハーバーマス自身がブーバーに言及することは、それまでほとんどなかった。管見の限りでは、初期の論考「ユダヤ哲学者たちのドイツ観念論」において、ユダヤ神秘主義者の一人として名を挙げている程度である (vgl. Habermas 1981, 41 [52-53])。こうした経緯もあってか、両者の問題意識や立場における異同の詳細、さらにはブーバーからハーバーマスへの影響の有無については、未だ明らかではなく、議論が尽くされたとは到底言えない。

とは言え、両者の比較に取り組む先行研究がないわけではない。たとえば Oram (2012) は、共同体と個人の道徳的責任の関係に着目して、両者の著作をそれぞれ横断的に参照しつつ比較検討を行っており、この分野における嚆矢と言える労作である。しかし、Oram はブーバーの対話思想の核心とも言える「我－汝」とハーバーマスのコミュニケーション論の関係といった問題は扱っておらず、そもそも「我－汝」についてほとんど言及していない。もちろん、これはブーバーの対話思想への Oram 自身の理解が不足しているためではない。むしろ逆であって、ブーバーに深く精通しているがゆえに、「我－汝」を当然の前提とし、その先に展開されるブーバーの人間学や社会哲学に目を向けているためであるように見受けられる。

だが、そうした言わば一足飛びの問題設定が有効であるためにも、やはりまずもって、ブーバー

の対話思想への入口となる「我－汝」が問題化されるべきではないだろうか。先述した通り、ハーバーマス自身も「我－汝」という表現を用いることがあるが、彼の著作における、ブーバーへの冷淡とも言える扱いを考慮すれば、そこにブーバーと同じ意味が込められているとは考えにくい。ハーバーマス自身がブーバーの思想にどれほど関心を抱いていたのかも含めて、両者の共通点よりもむしろ差異についての慎重な検討が必要なのではないだろうか。

こうした問題関心に基づいて、本稿は、ハーバーマスが用いる「我－汝」という表現の意味するところを検討し、それがブーバーとどれほど、そしてどのように異なるのかを明らかにすることを試みる。先述の Oram (2012) が比較的新しい研究であることからも推察される通り、両者の比較研究はこれまで盛んではなかった。本稿は、その基礎ないし出発点を不十分ながらも固めることによって、今後の展開を準備することを目指すものである。

本稿の議論は以下のように進行する。(1) ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論の基本的な枠組みを、行為者の取りうる態度に着目しつつ概括する。(2) 三つの妥当要求や三世界と結びついた三つの態度とは異なる、より原初的な態度およびパースペクティヴについての、ハーバーマスの議論を検討し、パースペクティヴの相補性が重要な要素であることを明らかにする。(3) パースペクティヴの相補性は、単なる子供の成長過程における一時的な要素ではないということを、主観性の哲学に対する批判から浮き彫りにする。(4) ブーバーにおける「我－汝」の意味するところを、主著『我と汝』から読み解く。(5) ハーバーマスのブーバーについての講演を取り上げ、両者の異同について若干の考察を加えた後、今後の課題を挙げて論を閉じる。

1. コミュニケーション的行為と、行為者の取りうる態度

周知の通り、ハーバーマスの『コミュニケーション的行為の理論』における議論の眼目は、マックス・ヴェーバーが理性のもっとも発展した段階であると考えていた目的合理性とは区別される、コミュニケーション的合理性を擁護することにある。より具体的には、成果を志向する態度からなされる「戦略的行為」とは区別される、了解を志向した態度からなされる「コミュニケーション的行為」(Habermas 1981 [1987], 28 [上 33]) の詳細と、その優位性が論じられる¹。

コミュニケーション的行為は、さらに三種類に分類されうる。すなわち命題的真理性要求を掲げる事実確認的発話行為、規範的正当性要求を掲げる規制的発話行為、そして主観的誠実性要求を掲げる表的発話行為である (vgl. 414ff. [中 50-52])²。

その各々に対応する形で、話し手の態度も三つの基礎的態度に細分化される。すなわち、事実確認的発話行為は「中立的な観察者が世界内で起こる何かに対して関係する際の客觀化的態度 (objektivierende Einstellung)」(415 [中 51]) と結びついている。規制的発話行為は「社会集団の成員が正統な行動期待を満たす際の、規範に従う態度 (normenkonforme Einstellung)」(ebd.) に、

¹ ハーバーマスによれば、了解を志向した発話こそが「本源的発話法 [Originalmodus]」(388 [中 25]) であり、戦略的な発話は、それに「寄生的 (parasitär)」(ebd.) である。

² これら三つの妥当要求が、一つの発話においてなされ、その各々について批判される事もありうる (vgl. 411f. [中 47-48])。

そして表的發話行為は「自己自身を表現している主体が、自分が特權的な通路をもつ自分の内面の何かを公衆の面前にさらす際の表的態度 (expressive Einstellung)」(ebd.) に結びついている。さらに、これらはそれぞれ、客觀的世界・社会的世界・主觀的世界に関わる行為であり態度である³。

まとめると、以下のような対応関係があることになる。

- (1) 客觀的世界——客觀的態度——事實確認的發話行為——命題的真理性要求
- (2) 社会的世界——規範に従う態度——規制的發話行為——規範的正当性要求
- (3) 主觀的世界——表的態度——表的發話行為——主觀的誠實性要求

しかし、これら三つの領域は互いに断絶しているわけではない。たとえば、ペーターがフリーダを愛していることを誠実に告白する場合、これは表的態度にもとづく表的發話行為であるが、その主觀的誠實性要求が認められる場合、われわれは、「ペーターはフリーダを愛している」という主張を真として受け入れてもよい。つまり、(3) から (1) への移行が許容されるのである (vgl. 442, Anm. 84 [中 91-92, 注 84])。それゆえ、われわれは三つの世界に同時に関わることになるが、こうした行き来や同時的な関わりは、上記の三つの態度のいずれか一つからなされるものではない。そこで、これらの三つの態度を包括する態度として、「遂行的態度 (performative Einstellung)」(442 [中 75]) というのも想定される。ハーバーマスは、H. スキャフハイムの議論を参照しつつ、意味の理解と間主觀性の関係について以下のように述べている (vgl. Precht 1996, 383f.)。

三人称の役割において世界内の何かを觀察するか、世界内の何かについて發話をを行う者は、客觀化的態度を取る。これに対して、コミュニケーションに参加し、一人称（自我）の役割において（そちらはそちらで、もう一つの〔第二の〕自我として、二人称としての〔第一の〕自我と関係する）二人称と間主觀的な関係に入る者は、非客觀的、あるいは今日のわれわれの言い方では、遂行的態度を取るのである。(Habermas 1981 [1987], 187 [上 169])

「遂行的」という語の意味するところは、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論がジョン・オースティンらの言語行為論を受け継ぎ、独自に發展させたものもある、ということを踏まえれば、ある程度想像がつく。オースティンは、「私はこの船を「クイーン・エリザベス号」と命名する」といった発話は、話者にその権限があるなどの条件が揃っている場合、自らの行為についての記述ではなく、命名の行為の遂行に他ならない、という事実を指摘した。彼は後にそうした行為を「發語内行為」として分析することになるが、当初は「遂行的發話」ないし「遂行体 (performative)」と呼んだのである (cf. Austin [1962] 1975, 5-6 [20-21])。

³ ハーバーマスの三世界論については以下を参照。Vgl. 114-151 [上 120-158].

とは言え、ハーバーマス（およびスキャフハイム）の言う「遂行的」は、オースティンのそれよりも一歩踏み込んだ意味を含んでいるようにも思われる。上の引用からも分かる通り、ここで言われる遂行的態度とは、どちらも一人称である二者が、相互に、二人称としての相手と間主観的関係に入ることに眼目があるような態度だからである。もちろん、オースティンにおいても、遂行的発話は話し手と聞き手の二者関係が無ければ成立しない。しかし、オースティンの議論の叙述そのものは、話し手と聞き手の対称性や間主観性に力点を置いたものにはなっていないのである⁴。

2. 遂行的態度と、「我と汝」のパースペクティヴ

ハーバーマスは、『道徳意識とコミュニケーション行為』において、遂行的態度と客観化的態度をふたたび対比しているが、その際、先に述べた三つの態度よりも包括的ないし原初的な、二つの態度の区別についても詳しく述べている。それによると、対話の過程に参加し、何かを言つたり言われたりする者は、「常に遂行的態度を取らねばならない」(Habermas 1983, 34 [45])。遂行的態度を取る者が「一人称と二人称の参加者のパースペクティヴ」(146 [213])を持つ一方で、客観化的態度を取る者は「三人称の観察者のパースペクティヴ」(ebd.)を持つのだという。

また、コミュニケーション的行為の三つの基礎的態度が三世界のいずれかに対する態度であり、「世界のパースペクティヴ」(148 [218])と結びついているのに対して、遂行的態度は「話者のパースペクティヴ」(ebd.)と結びついている、とも述べられている。この二つのパースペクティヴの対比は、参加者と観察者のパースペクティヴの対比にそのまま重なるものではなく、むしろ「交差する（verschränken）」(146 [213])。

一方で、コミュニケーションの参加者は、必要に応じて、存在する事態に対して客観化的態度を取り、正当な規則にもとづく人格相互の関係に対して規範に従う態度を取り、自己の体験に対して表的態度を取る（さらに、三世界の各々に対してこれらの態度をさらにまた変える）傾向を有する。他方で、彼らは、客観的、社会的、および主観的世界における何ものかについて相互に了解し合うために、一人称、二人称そして三人称というコミュニケーション上の役割と結びついた態度を取ることもできる。(149 [218])

このうち、一文目で述べられているのが世界のパースペクティヴにおける選択、二文目で述べられているのが話者のパースペクティヴにおける選択である。かなり複雑な話だが、要するに、参加者（一人称・二人称）のパースペクティヴも、観察者（三人称）のパースペクティヴも、コミュニケーション上の役割を引き受ける点では同じカテゴリーに属すると言える。それがすなわち話者のパースペクティヴである。対して、世界のパースペクティヴは、われわれが他者との相

⁴ オースティンは、話し手が発語内行為を遂行するためには、聞き手からの「理解の獲得（securing of uptake）」(117 [179])が必要であると述べている。この表現が、たとえばハーバーマスの言う「了解」と比べて、やや一方向的な印象を与えることは否定できないだろう。

互了解的なコミュニケーションを志向するか否かという文脈とは独立に、自らが関わる世界を選択することができることを表している。たとえば、客観的世界とかかわることを選択する場合、対話相手を手段として扱い、利己的な戦略的行為を働くという場合も考えられるし、相手との了解を志向して、命題的真理性要求を掲げるという場合も考えられるのである。

ハーバーマスによれば、子供の成長過程においては、こうした複合的なパースペクティヴの体系が「観察者のパースペクティヴと我－汝のパースペクティヴという二つの根から発展していく」(150 [219])。

一方では、子供は、彼の自然的環境との知覚や操作による交渉を通じて、観察者のパースペクティヴを手に入れる。また他方では、(社会化のための相互行為という枠で) 保護者(Bezugsperson)とのシンボルに媒介された交渉を通じて、相互に関連し合う我－汝のパースペクティヴを身に付ける。観察者のパースペクティヴは、後に、外的自然(あるいは存在する事態の世界)に対する客観化的態度として固定されるようになる。他方、我－汝のパースペクティヴは、話し手と聞き手のコミュニケーション上の役割に結びついた前述の一人称と二人称の態度として存続するようになる。(ebd.)

これまでの議論の流れを踏まえれば、ここで言う「我－汝」のパースペクティヴが、コミュニケーションの参加者のパースペクティヴへと発展する前段階の、原初的なパースペクティヴを指していることが分かる。ハーバーマスはここで、ローレンス・コールバーグや R. L. セルマンらによる発達心理学の知見を取り入れ、仮説を展開しているが、その詳細については割愛する。また、「我－汝」という表現そのものは、ジョージ・ハーバート・ミードの社会的自我論から着想を得たものであると考えられる⁵。

本稿の主題に即して重要なのは、ハーバーマスが言う意味での「我－汝」のパースペクティヴに特徴的な事は何か、ということであった。これに対してハーバーマスがセルマンから引き出す答えは、「参加者の行為パースペクティヴの相補性 (Reziprozität)」(169 [244-245]) である。つまり、他者の行為のパースペクティヴに身を置いて考えることが可能であり、かつ、他者も自分の行為のパースペクティヴに身を置いて考える事が可能だということを知っている、ということである (vgl. 156 [228])。

以上の考察を簡潔にまとめよう。コミュニケーション的行為をめぐっては、三つの妥当要求や、それに結びついた態度や世界が重要なトピックとなる。しかし、その前提として、コミュニケーションの参加者は、まさに参加者のパースペクティヴを持つ必要があり、原初的な形態においては「我－汝」と表現されるそのパースペクティヴの特徴は、パースペクティヴの相補性にあると

⁵ ハーバーマスは多くの主著でミードの議論を援用しており、その影響関係やハーバーマスが付け加えた要素を明らかにすることは重要な課題だが、本稿では立ち入ることができない。以下では、あくまでハーバーマス自身は「我－汝」という表現をどのような意味で用いているか、という問題について、限定的な考察を行うにとどめておく。

ハーバーマスは考へているのである。次節では、能力の獲得とは異なる文脈の議論からも、このことが示されうることを論じることにする。

3. パースペクティヴの相補性と、主観性の哲学批判

ハーバーマスは、1970年から71年にかけてアメリカで行った連続講義の第二回講義において、フッサール現象学を社会理論の基礎に置くことの不可能性を論じている。フッサールは、われわれが日常を経験するのは間主観的に共有された生活世界においてであり、それゆえ日常経験は私的なものではないと考えていた。だが一方で、彼の現象学の基本的な前提是、われわれの意識は何かへの志向性を持つ作用であり、何かを思う作用（ノエシス）だ、ということである。この作用には、志向的対象（思われたもの、ノエマ）の存在の措定が結びついている。それゆえ、フッサールにおいては、「生活世界全体も、そっくりそのまま、こうした措定として理解されている」（Habermas [1984] 2009, 63 [52]）のであり、生活世界が素朴実在論的に（いわば客観的に）捉えられるのは、自然的態度によるものとされる。

ところが、こうした前提からは、生活世界の間主観性を説明することが困難である。フッサールは、「私はどのようにして [...] 別の自我を構成するするのか、また同時に、私の中に構成されたものを、それでもなお別の自我として経験することができるのか」(72 [65]) という問題に直面していた。これこそが、彼の『デカルト的省察』の課題だったのである。しかしながら、フッサールの現象学的な出発点からはこの課題を解決することができないことを、ハーバーマスは指摘する。

フッサールの場合、わたしが [...] 他者の内面の立場に自分を移し替え、他者の世界を自分の世界と同一視するという点にまでしか構成を貫徹していない。しかしながら、共通の世界は、他者の場合にも、私の [...] 内面の立場に、彼自身を移し替えることができ、私の世界と彼の世界を同一視することができる対照的関係を通じて、はじめて構成されるものなのである。こうした完全な相補性を、フッサールは構成することができない。なぜなら、現象学的アプローチは、その証示の最終的に可能な地平が、つねに瞑想する私の主観性でなければならないという理由から、私とその時々の他者との非対称性を強く求めるものだからである。
(78 [74])

ここで言及されている「相補性」は、パースペクティヴの「交換可能性〔Austauschbarkeit〕」(75 [70])、あるいは「相互的交差〔wechselseitige Verschränkung〕」(78 [74]) とも表現される。意識哲学的な主観性の優位を主張する論者に対しては、ハーバーマスは一貫して、この相補性の重要性を強調することで反論してきた。たとえば、1980年代に、ハーバーマスは、現代においてもなお強硬に主観性の哲学を展開するディーター・ヘンリッヒと論争を行ったが、そこでは以下のように述べている。

[コミュニケーションの]当事者は、[…]相互に相手に対して話し手と聞き手の役割を […] 取り合うことができなければならない。話し手の役割によって確定される人称間の相補的な (reziprok) 関係は、認識したり行為したりする主体が先行的意識としての自己について行う孤独な反省を決して前提しないような自己関係 [のあり方] を可能にする。(Habermas 1988, 32 [38])

さらに、1995 年にある雑誌上で組まれたハーバーマス特集においては、ヘンリッヒと同様に主観性を重視するマンフレート・フランクらからの批判に対して、「我と汝が相互に二人称に対して遂行的態度を取り合う相互関係が再帰的になることで、非客觀化的な自己関係が成立する」(Habermas 1995, 563) と反論している。「相補性」という語こそ用いられていないが、依然としてハーバーマスの立場が一貫していることが伺える。

以上のことから、パースペクティヴの相補性は単に子供の成長途上における一時的な、それを過ぎた後は解消されるような特徴ではなく、むしろ、主観性の哲学に抜け落ちている要素であり、その意味ではコミュニケーションの間主観性を構成する不可欠の要素だとハーバーマスは考えている、と結論付けることができる。また、ハーバーマスが「我－汝」という語を用いるときには、そうした相補性を念頭に置いているということも明らかとなったように思われる⁶。

以下では、こうしたハーバーマスの意味での「我－汝」が、ブーバーの言うそれと、どの程度親和的であり、またどの点において異なるのかを明らかにしたい。まず、ブーバーの主著である『我と汝』を参照し、「我－汝」とはどのような概念であるのかを確認しておこう。

4. ブーバーにおける根元語「我－汝」

ブーバーは、『我と汝』の冒頭において、「我－汝 (Ich-Du)」・「我－それ (Ich-Es)」という二つの「根元語 (Grundwort)」を導入している。これら二つの根元語は、人間によって語られるものであるが、それは文字通りの意味での語りではなく、一種のメタファーである。つまり、実際にこれらの単語を口に出すことが語りなのではない。これらの根元語が示しているのは、人間が自分以外のものに対して取る「態度 (Haltung)」(Buber [1923] 2019, 39 [5]) の違いである。ブーバーは次のように述べている。

⁶ ところで、ハーバーマスはロバート・ブランダムの規範的語用論について、ディスクルス実践を二人称のパースペクティヴから探求すると標榜しているながら、実際には、妥当要求を掲げる一人称と、他者に妥当要求を割り当てる三人称の関係の探求になってしまっていると指摘している。本来であれば、「直接関わっている者たちは、遂行的態度を取る。そして、一人称から二人称へ話しかける態度を互いに取り合うことによって、肯定的であれ、否定的であれ、あるいは無反応であれ、相互に返答を期待している」(Habermas 1999, 174 [209])。ところが、ブランダムはこうした間主観性としての二人称性を無視しているため、奇妙な客觀主義に陥っているのだという。この批判は、主観性の哲学に向けられたものではないが、しかし、三人称的なコミュニケーション観もまた、(本稿の解釈によれば) 間主観性の内実を成しているパースペクティヴの相補性を、正しく捉えられないとハーバーマスが考えていることが分かる。なお、このハーバーマスによるブランダム批判の重要性については、佐々木尭氏からご教示いただいた。

根元語「我－汝」はただ存在の全体でもってのみ語られうる。／根元語「我－それ」は決して存在の全体でもっては語られ得ない。[…]「我」であることと、「我」を語ることとは同一である。「我」を語ることと、二つの根元語のうちのいずれかを語ることとは同一である。／いずれかの根元語を語る者は、その根元語のなかへ歩みいり、そのなかに立つ。(ebd. [6-7])

存在の全体でもって語るという「我－汝」の態度を理解するためには、まず、それとは異なる「我－それ」の態度がどのようなものかを確認するのがよい。「我－それ」の態度とは、「他動詞の領域」(40 [7])において、何かを対象とし、それについて何かをする態度である。このとき、「彼」や「彼女」も「それ」に含まれる。たとえば、われわれが誰かについて話をしているとき、その人は「我」にとっての「それ」である。こうした態度は、われわれが日常生活において慣れ親しんでいるものである。むしろ、それ以外に何があるのか、と問いたくなるかも知れない。

しかし、「汝を語るとき人間は、何かを対象として有したりはしていない」(ebd.)とブーバーは言う。「それ」であるような何かは、常にそれ以外の何かと隣接している。われわれがAさんについて噂話をしているときはいつでも、Bさんについて、あるいは他の人や物事について噂話をすることも可能である。対して、二人称的に「汝」と対峙する場合、汝は「何ものにも隣接していない」(ebd. [8])。むしろ、その時人は「独占的に(ausschließlich)」(48 [25])「関係の中に立つ」(40 [7])のである。ブーバーはまた、経験の世界と関係の世界とを区別する。前者は、われわれが「我－それ」の態度において何かを対象化する世界である。一方、われわれが他者と「我－汝」関係を取り結ぶとき、われわれは直接的な関係の世界に身を置いており、そこでは「汝」を構成する諸要素は後景に退いている。

ブーバーの独特的な用語法は、読者を惑わしかねないものであるが、彼が言わんとしていることはシンプルである。つまり、向かいあう相手との二人称的な関係や、その際に自分が取る態度は、三人称的な事物や他人との関わりや、その際の態度とは根本的に異なっている、ということに尽きる。「汝」と真摯に向き合っているとき、「我」は「汝」を「汝」以外の何かと並列的な存在として捉えない。「汝」との関係が、「我」にとっての現在であり、直接性である。「汝」にはその外との境界がない(vgl. 42-43 [13-14])。

言うまでもなく、人間はそのような浮世離れた世界を生き続けるわけではない。むしろ、われわれの日常生活を振り返ってみれば、「我－それ」とブーバーが呼ぶ態度に身を置いていることの方がはるかに多いだろう。ブーバーも、その事実を否定しているわけではない。たとえば、「我－汝」関係を取り結ぶことができていた相手との対話が終わり、別れた瞬間、「汝」は「その人」になるわけだ。こうしたことは無数に起きているが、ブーバーによれば、あらゆる「汝」が「それ」にならざるを得ないことは、「人間の運命の崇高な憂鬱」(48 [25])である。

だがその一方で、われわれは「汝」と出会いもする。昨日、対話の終了に伴って別れた人と、今日ふたたび顔を合わせて「我－汝」関係に入ることもできるのである。ただし、「それ」がいつも「汝」になるのか、それどころか、そもそも私の前に「汝」が現れるのかは、あらかじめ約束されているわけではない。「我－汝」関係は、私一人で始められるものではないからだ。「私が『汝』

と出会いのは恩寵によってである、——探し求めることによっては「汝」は見いだされない」(44 [17])。

以上の要約からもすでに明らかなことだが、ブーバーは、二つの根元語に対応する態度のうち、本質的であるのは、物象化ないし客觀化を伴う「我-それ」ではなく、直接的な「我-汝」であると考えている。しかしながら、ブーバーは、人間は「我-それ」の態度に陥ってはならないとか、「我-それ」の態度そのものが悪である、などと考えているわけではない。「根元語「我-それ」は悪ではない、——物質が悪ではないのと同じように」(65 [62])。むしろ、ある意味では「我-それ」の世界も、人間存在にとって必要不可欠な領域である。たとえば、個人としてのわれわれ一人一人の個性は、「我-汝」関係からは生じない。「根元語〔我-それ〕における「我」は個我 (Eigenwesen) として発現し、自己を（経験と利用との）主体として意識する。[...] 個我是他のさまざまな個我から対比的に分離することによって発現する」(74f. [84])。それゆえ、個我としてのわれわれにとって、「我-それ」の世界はむしろ生まれ故郷なのである。

ブーバーが問題視するのは、個我が「我-それ」の世界にとどまり続けることである。「きみよ、「それ」なくしては人間は生きることができない。だが、それとともにのみ生きる者は、人間ではない」(58 [48-49])。われわれは周囲を対象化し、それとの対比によって自らの個性を獲得してゆくしかない。しかし、われわれは「我-それ」の世界からふたたび「我-汝」関係へと戻ってゆくこともできるし、戻ってゆかなくてはならないのである。

なお、「我-汝」の世界と「我-それ」の世界は、文字通りの意味で別世界なのではない。つまり、「我-汝」の世界に入った瞬間、身の回りのものすべてが消え失せて、魂の対話のようなものが始まるわけではない。「我-汝」関係に入るとともに、「むしろ、他のすべてがその「汝」の光の中で生きるのである」(43 [14])。つまり、「それ」は消え去るのではなく、後景に退くのである。そうでなければ、われわれは「我-汝」関係の中で、何かについて対話するということがそもそもできないであろう。

以上、ブーバーの言う「我-汝」とは何かということを、「我-それ」との対比によって明らかにした。最後に、一つの根本的な問い合わせておこう。いったいなぜ、われわれは繰り返し「我-それ」の世界へと落ち込んでいきながらも、ふたたび「我-汝」関係へと戻っていかなくてはならないのだろうか。つまり、なぜ「我-汝」は「我-それ」に対してこうした規範的ないし統制的な役割を果たすことができるのだろうか。

その答えは、あらゆる人間同士の「我-汝」関係は、「永遠の汝」、すなわち神との「我-汝」関係を部分的に反映したものだからだ、というものになる。「あらゆる個々の「汝」は、永遠の「汝」がそれを通して望み見られるひとつの狭間である。あらゆる個々の「汝」を通して、あの根元語は永遠の「汝」に語りかけるのである」(82 [98])。

5. ハーバーマスのブーバー解釈と、間主觀性の根拠への問い合わせ

ハーバーマスは、冒頭で紹介した記念講演において、彼なりのブーバー理解を披露している。その内容を確認した上で、ブーバー自身が述べていることとの異同を挙げることにしよう。まず

目を引くのは、ハーバーマスが意外にも、ブーバーの言う「我－汝」を、そのまま無造作にパースペクティヴの相補性と結び付けているように見えることである。

いかなる人格間の関係も、それぞれの参加者が相手のパースペクティヴを取り入れができるように、当事者が互いに向かうパースペクティヴが相補的に相互浸透していることを必要とする。それは、受け手となる人格が話し手の役割を引き受け、またそれとちょうど同じように、今度は話し手が受け手の役割を引き受ける、という対話的関係の一部を成している。この対称性とは対照的に、観察者の眼差しは、観察者の眼差しを返すことのできない対象へと、非対称的に固定されている。(Habermas 2015, 11)

これは明らかに、対話における二人称的な関係一般についてのハーバーマス自身の見解に沿った説明である。しかしながら、ブーバーがここまで相補性ないし対称性を「我－汝」に読み込んでいるかと言えば、やや疑問の余地がある。たとえば、ブーバーは「[[我－汝]] 関係は、私が「汝」と呼びかける人間が、自分の経験にかまけていてその呼びかけを聞きのがすときさえ、成り立ち得る」(Buber [1923] 2019, 43 [15]) と述べている。また、ブーバーの考えでは、関係への私の意志と、恩寵のはたらきとが揃いさえすれば、「我－汝」関係は樹のような自然物との間にさえ成り立つことがあり得る(vgl. 42 [12])。ハーバーマスは、そのどちらも認めないだろう。

もう一点検討しておかなくてはならないのは、「永遠の汝」の役割をどう評価するかである。これは、ハーバーマスの講演からというよりも、むしろ両者の「我－汝」を比較した結果、自然に生じてくる疑問であろう。すなわち、ハーバーマスは、ブーバーの言う「永遠の汝」のような存在の意義を、自らの言う「我－汝」に対しても認めるだろうか、という疑問である。

ハーバーマスは、神の始原語との出会いによってこの世界におけるあらゆる会話が可能になっている、というブーバーの発想を取り上げ、ブーバーもまた、言語の重要性を論じる20世紀の哲学の潮流にある意味で棹差していたのだ、と持ち上げて見せる(cf. Habermas 2015, 15)。しかし、ハーバーマス自身はどうだろうか。ポスト形而上学の学者である彼が、間主觀性を一般に可能にする根拠として、神に相当する形而上学的な何かを想定するとは考えにくい。しかし、ブーバーが「我－汝」の優位性をためらいなく語ることができるのは、そうした根拠が確保されているからに他ならない（無論、根拠自体の妥当性もまた問われるにせよ）。ハーバーマスは、コミュニケーション的合理性を擁護するためにコミュニケーション的行為の理論を展開しているのか、それとも、間主觀性の根拠付けはそもそも必要ないのだろうか。あるいは、『道徳意識とコミュニケーション行為』においては役割が明らかでない「理想的発話状況」(Habermas 1983, 98 [142]) がそれを担うのだろうか。本稿でこの問題に十分に取り組むことはもはやできない。

この点を含め、本稿の議論は、ハーバーマスとブーバーの関係について一定の回答を示したというよりも、むしろ多くの課題を残した形となった。今後の機会を期して、ひとまず論を閉じる

ことにしたい⁷。

(よしめみちひと 哲学哲学史・准教授)

文献一覧

- Austin, John L.** ([1962] 1975), *How to Do Things with Words*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (J・L・オースティン著、飯野勝巳訳、『原語と行為 いかにして言葉でものごとを行うか』、講談社（講談社学術文庫）、2019年。)
- Buber, Martin** ([1923] 2019), "Ich und Du", in: Paul Mendes-Flohr und Bernd Witte (hrsg.), *Martin Buber Werkausgabe: Im Auftrag der Philosophischen Fakultät der Heinrich Heine Universität Düsseldorf und der Israel Academy of Sciences and Humanities*, Bd. 4, München: Gütersloh, S. 37-109. (田口義弘訳、「我と汝」、『ブーバー著作集1 対話の原理I』、みすず書房、1967年、所収、pp. 1-179。)
- Eisenstadt, Samuel N.** ([1997] 2002), "Martin Buber in the Postmodern Age: Utopia, Community, and Education in the Contemporary Era", in: Mendes-Flohr, Paul (ed.), *Martin Buber: A Contemporary Perspective*, pp. 174-183.
- Habermas, Jürgen** (1981), *Philosophisch-politische Profile*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (J・ハーバーマス著、小牧治／村上隆夫訳、『哲学的・政治的プロフィール 上』、未來社、1984年。)
——— ([1981] 1987), *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd. 1, 4. Aufl., Frankfurt am Main: Suhrkamp. (ユルゲン・ハーバーマス著、河上倫逸／M. フーブリヒト／平井俊彦訳、『コミュニケーション的行為の理論（上）』、第11刷、未來社、2006年；ユルゲン・ハーバーマス著、藤澤賢一郎／岩倉正博／徳永恂／平野嘉彦／山口節郎訳、『コミュニケーション的行為の理論（中）』、第9刷、未來社、2009年。)
——— (1983), *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (ユルゲン・ハーバーマス著、三島憲一／中野敏男／木前利秋訳、『道徳意識とコミュニケーション行為』、勁草書房、1991年。)
——— ([1984] 2009), „Verlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie”, in ders: *Philosophische Texte*, Bd. 1, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (森元孝／千川剛史訳、『意識論から言語論へ 社会学の言語論の基礎に関する講義（1970/1971）』、第2刷、マルジュ社、1994年。)
——— (1988), *Nachmetaphysisches Denken*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (ユルゲン・ハーバーマス著、藤澤賢一郎／忽那敬三訳、『ポスト形而上学の思想』、初版第4刷、2000年。)
——— (1995), „Replik”, in: *Revue Internationale de Philosophie*, vol. 49, no. 194 (4), S. 551-565.
——— (1999), *Wahrheit und Rechtfertigung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (ユルゲン・ハーバーマス著、三島憲一／大竹弘二／木前利秋／鈴木直訳、『真理と正当化』、法政大学出版局、2016年。)
——— (2015), “A Philosophy of Dialog”, in: Mendes-Flohr, Paul (ed.), *Dialogue as a Trans-disciplinary Concept: Martin Buber's Philosophy of Dialogue and its Contemporary Reception*, Berlin/Munich/

⁷ 本稿は、JSPS 科研費 JP22K12961 の助成を受けたものである。

Boston: De Gruyter.

Oram, Matan (2012), "Dialogue and Communicative Action: Buber's Philosophy of Dialogue and Habermas's Communicative Action", in: *Naharaim*, 6(2), 269–285.

Prechtl, Peter (1996), „Performativ“, in: Prechtl, P. und Burkard, F.-P. (hrsg.), *Metzler Philosophie Lexikon*, Stuttgart/Weimar: J. B. Metzler, 383f.

いずれの文献についても、邦訳を参照した場合は対応するページ数も併記している。同じ著作からの引用が連続する場合は、ページ数以外を省略する。なお、訳文については基本的に邦訳に従ったが、引用者の判断で適宜変更を加えている。

Reziprozität der Perspektiven und das Grundwort „Ich-Du“: Zum Vergleich von Habermas und Buber

Michihito YOSHIME

Im Mittelpunkt der Habermas'schen Theorie des kommunikativen Handelns steht die Erörterung der Kategorie des kommunikativen Handelns in Abgrenzung zum zweckrationalen strategischen Handeln. Dementsprechend wird zwischen ergebnisorientierten und verständigungsorientierten Einstellungen unterschieden. Die kommunikativen Handlungen werden weiter in drei Kategorien eingeteilt, und dementsprechend wird auch die letzte Einstellung in drei Kategorien unterteilt.

Neben diesen Einstellungen als Unterteilung der verständigungsorientierten Einstellungen spricht Habermas aber auch von einer grundsätzlicheren Einstellungsunterscheidung. Es handelt sich um die Unterscheidung zwischen der objektivierenden (oder dritt-persönlichen) Einstellung, die mit der Beobachterperspektive verbunden ist, und den Einstellungen der ersten und zweiten Person (oder von Teilnehmern), die die Ich-Du-Perspektive widerspiegeln.

Der Ausdruck „Ich-Du“ wurde bekanntlich von Martin Buber in seiner Philosophie des Dialogs zum „Grundwort“ neben dem „Ich-Es“ bestimmt, und Buber befand die „Ich-Du“-Haltung als eine für den Menschen wesentliche Haltung. Habermas bezieht sich jedoch nur selten auf Buber. Wenn Habermas sich mit Blick auf die Entwicklungsstufen unserer kommunikativen Kompetenz auf die Ich-Du-Perspektive bezieht, hat er dabei die Theorie des sozialen Selbsts von George Herbert Mead im Sinne, nicht die von Buber. Es ist daher nicht klar, was genau er mit „Ich-Du“ meint. Insbesondere die Frage, inwiefern sich dies von dem unterscheidet, was Buber meint, muss untersucht werden.

In der vorliegenden Abhandlung wird es darum gehen, dass Habermas im Rahmen seiner Kritik an der Philosophie der Subjektivität häufig auf die „Reziprozität“ der Perspektiven verweist. Da es sich bei der Übernahme der Reziprozität wahrscheinlich um eine Ich-Du-Haltung handelt, ist es genau das, was sie von der Ich-Du-Haltung bei Buber unterscheidet, so der Schluss der Abhandlung.

「キーワード」

ハーバーマス、ブーバー、「我－汝」、間主観性、遂行的態度